

## 「フェザートップ」における語り手と読者

藤沢 徹也

### I はじめに

「フェザートップ: 教訓となった伝説」(“Feathertop: A Moralized Legend”)は1852年の『インターナショナル・マンスリー・マガジン』(*International Monthly Magazine of Literature, Art, and Science*)の2月号と3月号に掲載され、1854年に『旧牧師館の苔』(*Mosses from an Old Manse*)の第2版に入れられた。ナサニエル・ホーソーン(Nathaniel Hawthorne)の最後の短編であるが、『アメリカン・ノートブックス』(*American Notebooks*)の記述によりかなり以前から構想があったことがわかる。1840年のところに次のように書いてある。

To make a story out of a scarecrow, giving it odd attributes. From different points of view, it should appear to change,—now an old man, now an old woman,—a gunner, a farmer, or the Old Nick. (VIII 185)

もう1箇所関連した記述が1849年3月16日(金)のところにある。

A modern magician to make the semblance of a human being, with two laths for legs, a pumpkin for a head &c—of the rudest and most meagre materials. Then a tailor helps him to finish his work, and transforms this scarecrow into quite a fashionable figure. N.B.—R.S.R. At the end of the story, after deceiving the world for a long time, the spell should be broken; and the gray dandy be discovered to be nothing but a suit of clothes, with these few sticks inside of it. All through his seeming existence as a human being, there shall be some characteristics, some tokens, that, to the man of close observation and insight, betray him to be a mere thing of laths and clothes, without heart, soul, or intellect. And so this wretched old thing shall become the symbol of a large class. (VIII 286)

1843年の8月8日の『アメリカン・ノートブックス』に「ティークによる物語」(“tale of Tieck”)を読んでいるとあり、これは *Die Vogelscheuche* というドイツ語の本であろうと推測されている。そのドイツ語の題名の意味は「かかし」であり、その推測の根拠はアルフレッド・A・カーン(Alfred A. Kern)が詳しく論じている。さらに、彼は推測の域を出ないが1840年の書き込み、ティークの物語を読んだこと、そして、1849年の書き込みが「フェザートップ」につながっていったと結論づけている。この作品の時代設定は、島田太郎によると、ウィリアム3世

(在位 1689-1702) の宮殿への言及があるので、「おそらく 17 世紀のセイレムの魔女裁判が行われる直前と推定できる」(7)。

「フェザートップ」に関する論文は非常に少なく、ホーソーンの研究書でも言及されることはほとんどない。それにもかかわらず、Norton の Critical Edition として編集された短編集に収録され、論文が 1 本載っているが、各作品に対して論文を紹介しているところでは 1 本も記載されていない。岩波文庫から出された坂下昇訳の『ホーソン短編集』にも収録され、YOHAN の Ladder Edition の 2000 語レベルに *The Best of Hawthorne – Twelve Short Stories* というのがあり、そこにも収録されている。また、マンガになったり、テレビドラマになったり、*The Scarecrow* というアニメ映画になったりもしている。学術的に言及されることは少ないが、一般受けはいいようだ。

ここで簡単にあらすじを紹介しておきたい。

魔女のリグビー (Rigby) は、かかしを作ることにする。材料は空を飛ぶのに使ったほうきなどであり、頭にはカボチャを使用する。とてもよいできだったので、リグビーが使っている魔法のパイプを吸わせて、紳士に変える。フェザートップ (Feathertop) という名前をつけて、知り合いのグーキン (Gookin) のところに行き、彼の娘のポリー (Polly) をものにするように命じる。ポリーはフェザートップに恋をするが、真実を表す鏡にフェザートップの本当の姿が映ってしまい、ポリーは気絶しまう。フェザートップは失望しリグビーの家に戻ってくるが、再び世に出ることを拒否し、元のほうき等の素材に戻ってしまう。リグビーはモラルとして次のように言う。世の中には中身はがらくたなのに世間ではもてはやされ、自分の本当の姿は見えない。偽善の世の中で生きていくにはフェザートップには心がありすぎる。最後に、彼女はフェザートップのくわえていたパイプを口にくわえる。

物語構造を考えると、フェザートップはリグビーの家を出て、再び戻ってくる。行って帰ってくるという物語構造において、困難を乗り越え、お姫様を得て、成長して帰ってくるのが定番のひとつの中、フェザートップは魔女の力により成功を約束されていたにもかかわらず、お姫様を得ることに失敗し、敗北して帰ってくる。フェザートップが本当の自分を直視できるようになったという点では成長しているのだから、教養小説と考えることもできるかもしれない。

心優しいからこそうまくいかないといった、センチメンタル小説のような雰囲気を持っているように感じる。センチメンタル小説といえば、ホーソーンが「物書き女」について書いた手紙が思い出される。つまり、1855 年 1 月 19 日、友人で彼の本の出版人であったウィリアム・ティックナー (William Ticknor) への手紙に、こんなことを書いている。「アメリカはいまや、いまましい物書き女の大群に完全に乗っ取られている。世の中の趣味がああいう連中の書くがらくたに支配されている限り、私に成功のチャンスはないでしょう — 万が一成功したらわが身を恥じることになるでしょう」(XVII 304)。

しかし、そうは言いながらもホーソーンが本の売れ行きを意識していたことはよく知られている。直前に出版された『七破風の屋敷』 (*The House of the Seven Gables*) で読者を意識し

て、暗い話にならないように不自然なハッピーエンドにしたとすれば、今回もまた、読者を意識し、センチメンタル小説としても読めるものを書いたのかもしれない。内面と外面の乖離に関しては「ラパチーニの娘」(“Rappaccini’s Daughter”)ほど深いとは思えない。目に見えない召使いのいる魔法使いであるリグビーや真実を映す鏡といったスーパーナチュラルな仕掛けは、18世紀のゴシック小説から来ていて(Newman 121-22)特に目新しいことはない。一見、軽いセンチメンタル小説のようにも見えるが、モラルの裏に、創作ノートにもあるように心も、魂も、知性もないわべだけの大衆、つまり、物語の表面を軽く読み流すことしかできない読者を浮かび上がらせ、さらに、そのことに気づかない読者の姿を示すと共に、作者は彼らに失望していることを論じたい。

## II 語り手

地の文で、「～のようだ」という意味の *seem* は 14 箇所、*appear* は 2 箇所ある。語り手がその場に居合わせて、淡々とその状況を説明していくのが基本の語りとなっている。つまり、あたかも作中人物かのような振る舞いをしている。一方で、全知から情報を提供したり、読者に語りかけたり、「私は」と介入して来たり、作中人物の内面描写をしたりする。視点は時々作中人物のものになるが、基本的に語り手の視点で語られる。ここで、読者と語り手の情報量に焦点を当ててみたい。堀田知子によると、「読者は、持っている情報の量が自分に近い登場人物に共感する傾向がある」(198)。作中人物のような特徴も持つこの作品の語り手に対しても同様のことが言えるであろう。語り手や語りの特徴、そして、それと読者との関係を見ていきたい。

語り手は自分のことを「ロマンス小説家」(X 230)であると述べている。「もし、この伝説が私[=語り手]の祖母の膝の上で聞いたものでなければ」(X 229)と語り手自身が祖母から聞いた物語ということで、おそらくは、多くの子供たちもそうしている昔話のような位置づけだと考えられる。そして、「この伝説の語り手の中には……と言うものもいる」(X 231)というふうに述べられていることから、この伝説にはいろいろな種類の解釈があるし、それが可能なことがわかる。これらのことを総合すると、昔話のような典型的な構造で、副題にもあるようにモラルについて語っていくけれど、細かいところの解釈はいろいろ可能であるということになる。

物語はリグビーが「ディコン、私のパイプに炭を」(X 223)と叫び、そのパイプに自然に火がつく様子を語り手がその場において、見ているような語りで始まる。しかし、「どこからその炭が来たのか、そして、どのようにして、そこに、見えない手によって持って来られたのか、私は知ることができないでいる (I have never been able to discover)」(X 223)と現在完了で言っているので、物語を書いている今も知らないということを伝えている。1 人称小説によくある、今物語を語っている私と、物語られている私がいると言える。また、その文面から、パイプに火がつくことについて語り手は全くわからないと読んでも不思議ではない。しかし、下の引用にあるように、2 回目の炭の補充のとき、最後に「私にはわからない」と締めくくっており、前回と同じことを繰り返しているのかと思うが、火種は特定の炉端、つまりいつも決まった炉端から来ることを語り手は知っているという情報がさりげなく読者に提示される。

Mother Rigby always liked to flavor her pipe with a coal of fire from the particular chimney-corner, whence this had been brought. But where that chimney corner might be, or who brought the coal from it — further than that the invisible messenger seemed to respond to the name of Dickon — I cannot tell. (X 226-27)

語り手は「私にはわからない」と読者と情報量を同じように見せかけて、読者が語り手に共感したり、信頼するように仕掛けたりしている。表面を読み流す読者には、今回のようにさりげなく情報を入れられたりして、語り手に知らないうちに読みを操られる可能性が十分あり、実際、語り手はそれを狙っている。

具体的に語り手が読者と情報量を同じにして、読者の共感を利用しつつ、読者の読みを操作している箇所を引用する。

It was settled, therefore, in her own mind, that the scarecrow should represent a fine gentleman of the period, so far as the materials at hand would allow. ①Perhaps it may be as well to enumerate the chief of the articles that went to the composition of this figure.

The most important item of all, probably, although it made so little show, was a certain broomstick, ②on which [= a certain broomstick] Mother Rigby had taken many an airy gallop at midnight, and ③which [= a certain broomstick] now served the scarecrow by way of a spinal column, or, as the unlearned phrase it, a backbone. One of its arms was a disabled flail, which used to be wielded by Goodman Rigby, before his spouse worried him out of this troublesome world; ④the other, if I mistake not, was composed of the pudding-stick and a broken rung of a chair, tied loosely together at the elbow. (X 224 番号・下線 筆者)

まず、下線①のように、「ひょっとしたら、それを作るに当たって用いられた、主たる素材を列挙しておくのも無駄ではあるまい」と読者のために語りかける。下線②で「ほうきに乗って、マザー・リグビーは真夜中何度も空をギャロップの速度で駆け巡っていた」と読者の知らない情報を提供したかと思うと、下線③にあるように「ほうきは今、脊柱 (spinal column)、無学な者の言葉では、背骨 (backbone) になっている」と言っているが、ここでは読者のために列挙して説明しているので、「無学な者の言葉」というと読者への挑戦となっているように見える。もしあからさまに読者を批判し敵に回すと、本が売れなくなってしまう。語り手は、無学な者の使う「背骨」と言い換えてくれなくても「脊柱」の意味はわかっていると読者が思うことは計算に入れている。勤務校のネイティブに確認したところ、spinal column という言葉は一般に普通に知っているということであった。あえてこのような言い方をしたのは、読者諸君は普段は「背骨」を使っていて、「脊柱」のような難しい言葉は普通使わないですよというメッセージを読者に送るためである。そして、すぐさま、下線④のように、「もう一方は、私が思い違

いをしていなければ、麵棒といすの折れた横木を、ひじになるところで、緩く縛っていた」と、この物語を書いている現在でも確信がないと言って、読者と情報量が同じであることを強調し、読者との共感を強める。そうすることにより、読者はからかわれる側ではなく、共感関係にある語り手、つまり、無学な人をからかう側に回る。そんな読者は「脊柱」という表現は普段は確かに使わないということ、つまり本当の姿に目を向けていないことを意味する。これは、リグビーが物語の最後に「本当の姿を見ようとしない」(X 245)と非難する、物語の中の大衆と同じであることになる。

また、地の文で We を使っている。語り手と読者で We だが、そう言っている箇所が 9 箇所あり、そのうち 6 箇所がフェザートップが人間に変わろうとしているとき、それを信じなければいけないという箇所に集中している。

“Puff, darling, puff!” said she. “Puff away, my fine fellow! Your life depends on it!”

This was a strange exhortation, undoubtedly, to be addressed to a mere thing of sticks, straw, and old clothes, with nothing better than a shrivelled pumpkin for a head; ①as we know to have been the scarecrow's case. Nevertheless, as we must carefully hold in remembrance, Mother Rigby was a witch of singular power and dexterity; and, ②keeping this fact duly before our minds, we shall see nothing beyond credibility in the remarkable incidents of our story. Indeed, ③the great difficulty will be at once got over, if we can only bring ourselves to believe, that, as soon as the old dame bade him puff, there came a whiff of smoke from the scarecrow's mouth. It was the very feeblest of whiffs, to be sure; but it was followed by another and another, each more decided than the preceding one. (X 227-28 番号・下線・囲み 筆者)

まだかかしが人間の姿に変わることがわかっていないとき、リグビーがかかしに向かって、たばこは命に関わっているからそれをふかせと言っているのを、語り手は奇妙な命令だと言う。そして、その命令は単なるかかしに対してであることを下線①にあるように、「私たち」は知っているとして現在形で書いているので、十分情報を持っている今語っている私が、あえて情報を隠し読者と不思議なことを体験することによって緊密になろうとしていると考えられる。一方で、読者はリグビーが並外れた力と才気がある魔女であることは知らないのだが、それを「私たち」は忘れてはいけないと言う。読者もそのことを知っていることが前提となり、語り手による単なる情報提供ではない。この場合、読者は宙ぶらりんの状態になる。その状態で、語り手は続けて下線②のように、リグビーの魔女としての力を心に留めていれば、私たちの物語で起こる異例の出来事も信じることができると言う。こうなると、読者は語り手に依存せざるを得なくなる。その後、下線③のように、かかしの口から煙が出てきたと私たちが信じれば、大きな困難がすぐに克服されるだろうと言って、この物語は語り手と読者、つまり「私たち」の物語であり、いっしょに信じる存在になって、物語を作っていくよう読者を誘っている。実際、その後かかしがどんどん口から煙を出してゆきその通りになるので、読者は語り手の言うことを信

じめることは物語を作っていくことにつながると思うようになる。言い換えれば、読者は語り手との共同作業で問題が解決したと錯覚したことになる。読者は語り手により宙ぶらりんにされ、気づかないうちに、語り手に寄り添うように仕掛けられている。

語り手は、「疑いなく、リグビーのパイプには魔法がかけられていた」(X 228)と断言するが、一方で、フェザートップが人間の姿に変わっていくのは目の錯覚ではないかとはぐらかす。

If we must needs pry closely into the matter, it may be doubted whether there was any real change, after all, in the sordid, worn-out worthless, and ill-jointed substance of the scarecrow; but merely a spectral illusion, and a cunning effect of light and shade, so colored and contrived as to delude the eyes of most men. The miracles of witchcraft seem always to have had a very shallow subtlety; and, at least, if the above explanation do not hit the truth of the process, I can suggest no better. (X 228-29)

確かに、かかしから人間の姿へと変化するというスーパーナチュラルな話ではあるが、語り手は自分のことをロマンス作家、つまり、「自由裁量」を多く持つ作家と表明している。目の錯覚と言うのは、そのような世界をどうしても理解しない読者へ歩み寄り、さらに、「私はそれ以上の代案を持たない」(I can suggest no better)と言って、情報量を読者と同じにして、ロマンスを理解しない読者を取り込もうとしている。

フェザートップがゲーキンの家の中に入り、その娘ポリーの説明に入る前に、物語の進行を次のように言って読者を語り手の都合に合わせてしようとする。「私たちの伝説はここで物語の連続性を中断し、フェザートップと商人の間の予備的な説明は省き、かわいいポリー・ゲーキンを探しに行くのである」(X 240)。わざわざ、「説明を省く」と言わなくても、物語進行にはたいして差し支えはなく、かえって、「省く」ということで、語り手とともに歩んできた読者が、語り手の権威の大きさを意識してしまい、これまでの読者を取り込もうとする語り手の苦労が水の泡となってしまう可能性もある。フェザートップが自分の本当の姿を見ってしまうクライマックスがある、ゲーキンの屋敷のシーンに来るまでに、読者を手のひらに乗せている自信が語り手にはあるのだろう。「私たちの伝説」と言い、語り手と読者は同等であることを装いながら、語り手の力で一方的に読者は操作されている。

### III 読者

読者のモデルが登場する。それは、ゲーキンの屋敷に向かうフェザートップが何者なのか様々に解釈する町の住民である。この作品のタイトルも「フェザートップ」なので、作品解釈と考えても良いであろう。読者はフェザートップの正体を知っている中、住民はパイプをくわえているからオランダ人であるとか、黄色い顔色だからスペイン人だとか推測し、ことごとく彼の正体を外していく。フェザートップはフランス大使だと主張する住民を例に取ってみたい。

“But, in my judgment, this stranger hath been bred at the French court, and hath there learned politeness and grace of manner, which none understand so well as the nobility of France. That gait, now! A vulgar spectator might deem it stiff—he might call it a hitch and jerk—but, to my eye, it hath an unspeakable majesty, and must have been acquired by constant observation of the deportment of the Grand Monarque. The stranger’s character and office are evident enough. He is a French ambassador, come to treat with our rulers about the cession of Canada.” (X 238)

フェザートップの歩き方は、体がほうきなどで作られているので、実際にぎこちないのだが、その住民は自分は他の者とは違うから、そのぎこちなさが実はすばらしいことを知っていると言う。ぎこちないからこそすばらしいと、かなりひどいこじつけをしている。実際、彼は貴族の優雅な物腰を見たことがないし、ましてや大王 (the Grand Monarque)、つまり、ルイ 14 世を目撃したことはないはずである。フランス貴族は優雅だという知識はあったようであるが、優雅な物腰を判断する知識がないから、とりあえず目の前にあるぎこちない歩き方が優雅だと結論づけている。また、無教養な人間 (a vulgar spectator) にはわからないと言っているので、自分には教養があることをひけらかしたいのだと考えられる。つまり、自分が見たいものを都合良く見ていることになる。

人間は見たいものしか見ないとよく言われるが、心理学者の安西祐一郎が『問題解決の心理学』の中で、次のように述べている。

自分自身の経験に基づいてかたちづくられるイメージは、実感として理解しやすいし、抽象的な思索に比べて、ごく短い時間のうちに心に思い浮かべることができる。だから、それが合理的な決定方法かどうかは別として、特に時間の切迫した状況では、私たちは自分自身のあのときのできごと、あのような経験を、イメージとして心に浮かべ、問題解決の際の根拠としてよく利用するのである (67)。同じものを見ても、見る人の[経験して持っている]知識によって違ったイメージが思い浮かぶ (71)。何のために見ているかによって、思い浮かべるイメージが変わってくる (75)。自分の問題解決のために都合のよいイメージを創りだせること、確かに私たち人間は、そういうことが可能なのである (79)。

住民たちはまさにこれが当てはまるが、度を超している。つまり、安易にフェザートップの正体を推測し物知り顔をしているが、中身は何もないことを表している。そして、そんな本当の自分を見ようとしていない人たちでもある。

フェザートップが鏡で自分の本当の姿を見るが、その直前にポリーは気を失っている。なぜだろうか。ポリーもフェザートップの本当の姿を見たからだと一般に考えられているが、ポリーがフェザートップの本当の姿を見たという記述はどこにも見当たらない。まず、ポリーについてどういう人物か確認しておきたい。屋敷の玄関前に立っているフェザートップを目にしたポリーは、おめかしをして、鏡の前でかわいい仕草の練習をしたり、自分の手にキスをしたり

するが、こんな「愚かな行為」を「恥ずかしいとは思わなかった」(X 240)。語り手は「フェザートップほど完全な作り物になれなかった」(X 240) と言っており、彼女も表面だけの人間だと言える。ロバート・アレン・ダー (Robert Allen Durr) が指摘するように、「フェザートップの女性版カウンターパート」(493)となっている。

ポリーとフェザートップが鏡を見るシーンを詳しく見たい。

By and by, ①Feathertop paused, and throwing himself into an imposing attitude, seemed to summon the fair girl to survey his figure, and resist him longer, if she could. His star, his embroidery, his buckles, glowed, at that instant, with unutterable splendor; the picturesque hues of his attire took a richer depth of coloring; there was a gleam and polish over his whole presence, betokening the perfect witchery of well-ordered manners. The maiden raised her eyes, and suffered them to linger upon her companion with a bashful and admiring gaze. Then, as if desirous of judging what value her own simple comeliness might have, side by side with so much brilliancy, ②she cast a glance towards the full-length looking-glass, in front of which they happened to be standing. It was one of the truest plates in the world, and incapable of flattery. ③No sooner did the images, therein reflected, meet Polly's eye, than she shrieked, shrank from the stranger's side, gazed at him, for a moment, in the wildest dismay, and sank insensible upon the floor. Feathertop, likewise, had looked towards the mirror, and there beheld, not the glittering mockery of his outside show, but a picture of the sordid patchwork of his real composition, stript of all witchcraft. (X 243-44 番号・下線 筆者)

すでに述べたように、ポリーがフェザートップのほうきなどの骨組みの姿を見たとはどこにも書いていない。確かに下線③でポリーは鏡の中の二人の姿 (the images) を見て悲鳴を上げ、彼 (him) を一瞬の間見つめ、気絶しているが、フェザートップがその後本当の自分の姿を鏡の中に見たからといって、ポリーもそれを見たことには必ずしもならない。それでは、どのようなことが考えられるであろうか。ポリーもフェザートップも中身がない偽物であるならば、ポリーは何を鏡の中に見たのだろうか。真実を映す鏡であれば、外見を着飾ったポリーの飾らない本当の姿が映っていてもよかったはずである。しかし、フェザートップが来る直前にもポリーはその鏡で自分の姿を見ているが、その外見を映すだけであつた。真実を映すという鏡が、今回も外見をそのまま映す普通の鏡の効果しかなかったとしたら、フェザートップは元の姿に戻りかけていたと考えることができる。フェザートップは 5、6 歩、歩くたびにたばこを吸っている。フェザートップがゲーキンの屋敷に着き、玄関をノックして、反応を待っている間、ディコンを呼んでパイプのたばこを交換するが、これを見ていた住民の一人が、このちょっとした間、ぼんやりとして、しぼんだように (dim and faded) 見えたと言っている。つまり、5、6 歩、言い換えると、少なくとも 5、6 秒たばこを吸うのを怠ると、あっという間に元の姿に



戻り始めると考えられる。下線①にあるように、「フェザートップは立ち止まり、堂々たる態度を取った、そして、その美しい娘に、自分の姿を見渡し、できるもんなら、見ることをやめてみると言っているかのようにだった。」フェザートップはこれまで経験したことの無い最高潮にあり、後もう少しで、ポリーが自分のものになりそうな雰囲気でもある。そのため、フェザートップがパイプを吸うのを忘れ、元の姿に戻り始めたちょうどそのタイミングをポリーが目撃してしまった可能性もある。

ポリーもうわべだけの存在なので、鏡に彼女の真の姿が映ってもいいようだが、そうはなっていない。ケネス・マーク・ハリス (Kenneth Marc Harris) は、他の人と比べて、フェザートップの内面は真実であり気高く、その素材は偽りの外見 (false appearance) をしているに過ぎない。逆説的に幻であるフェザートップは初めから真実の内面を持っており、「偽善の世界では、『幻』だけが内面の真実 (inner goodness) に忠実であることができる」(24)と論じている。要するに、偽善の世界では鏡に真実が映るのは生身の人間ではなく幻だけということになる。

ポリーが自分の真の姿を見た可能性もある。ポリーは今回、以前とは違って、下線②のように鏡をちらりと見ている (cast a glance) ことに注目すると、ハーマン・メルヴィル (Herman Melville) が「ホーソーンと彼の苔」(“Hawthorne and His Mosses”) で、うそのこの世の中において、真実はちらりとしか姿を現さない (342)と書いていたことが思い出される。鏡を凝視しているときには真実は姿を現さず、たまたま真実がちらりと鏡に姿を現した時を目撃した可能性が生じる。そう考えると、ポリーは真実の鏡に表面を飾らない本当の自分の姿を見てしまい、悲鳴を上げたことになる。つまり、真実の鏡はフェザートップだけでなくポリーの真の姿も映し出したことにもなる。

ポリーもフェザートップもともに偽物と語られながら、ポリーの実態が暴かれた可能性は考慮されていない。読者に内面と外面の乖離について切実な思いがないので、実際に暴かれるのはスーパーナチュラルなものだけという、読者が見たいものを見て終わっている結果と考えられる。語り手は、このように複数ある解釈を用意しているが、表面しか読まない読者は、センチメンタル小説の読み方で終わってしまう。

#### IV 悪循環を断つ

表面しか読まない読者が達したモラルとは何だったのだろうか。最後のモラルはリグビーの直接話法で語られ、彼女が語り手に取って代わってメイン人物となったと言えるであろう。この物語のモラルと直接考えられる 2 箇所を見たい。

“My poor, dear, pretty Feathertop! There are thousands upon thousands of coxcombs and charlatans in the world, made up of just such a jumble of worn-out, forgotten, and good-for-nothing trash, as he was! Yet they live in fair repute, and never see themselves for what they are! And why should my poor puppet be the only one to know himself, and perish for it?” (X 245)

“Poor Feathertop!” she continued. “I could easily give him another chance and send him forth again tomorrow. But, no! his feelings are too tender; his sensibilities too deep. He seems to have too much heart to bustle for his own advantage in such an empty and heartless world. Well, well! I’ll make a scarecrow of him, after all. ’Tis an innocent and a useful vocation, and will suit my darling well; and if each of his human brethren had as fit a one, ’twould be the better for mankind; and as for this pipe of tobacco, I need it more than he!” (X 246)

内面と外面が乖離していて、内面を見ない、つまり、本当の姿を見ないと語る。フェザートップをまた世間に送り出すことは可能だけれど、自分に得なように立ち回するには、どうやら心がありすぎるみたいなので、それを思いとどまる。モラルに関して、読者は自分のこととは思わず、フェザートップに同情して、センチメンタルな気分になって終わってしまうと考えられる。つまり、モラルが機能していないことになる。このことを考えるに当たり、長谷正人の『悪循環の現象学—「行為の意図せざる結果」をめぐって』を援用したい。社会学の本だが、この内容がそのまま「フェザートップ」に当てはまるという訳ではなく、考えるヒントになると思われる。

簡単にその内容を紹介すると次の通りである。まず、「行為の意図せざる結果」とは、「ある目的に向かって努力すればするほどかえって目的から遠ざかってしまうような現象」(i)を指す。また、その「行為の意図せざる結果」が悪循環を起こすことがある。悪循環とは、ある人が自身の置かれている状況を問題のあるものとみなし、これを解決しようとする行動に出るが、この解決行動自体がどうの問題を生み出してしまうというメカニズムを持ち、しかもこれが反復的に繰り返されるものを言う (78-79)。例として、門限を守らない少女と両親の関係を挙げている。両親は門限を守らない罰として門限をもっと早くするなどのお仕置きを課すが、娘はまた門限を破り、また両親は門限を課すという現象である (79-80)。このような現象には病理的な側面があり、ある治療法が有効だという。それはもっとひどい状況に追い込むことによって、患者の力を引き出すというものである (101)。少女が遅れて帰ってきてても両親は気にかけてふりをして、少女がもっと遅くなってもかまわない状況を作り出す。つまり、もっと門限を破りなさいと言うと、少女は遅い帰宅という反抗が無意味で魅力のないものになってしまうので、自然とやめるようになる (103-04)。社会現象を分析する社会学者は、その現象の外側から分析するのではなく、分析者自身もその現象に影響を与えていることを考慮に入れなければいけない。なぜならば、例えば、様々なデータから小麦の生産過剰を予想すると、それを聞いた農民が値崩れによって損をすることを避けるために小麦の生産を差し控え、予想が外れることがある。予想することが社会に影響を与えることも考慮に入れる必要がある(38)。

「フェザートップ」の場合、作者は一方的にモラルを提示するのではなく、それによって読者や社会にどのような影響を与える存在であるかを考慮する必要がある。モラルを示して、読者が自分のこととして自己反省して、何かプラスのことがあればいいのだが、これまで見てきたように、読者はそうはせず、センチメンタルな話に満足してしまう。モラルに関する物語を

書くことは、本当の自分を見ない偽善の世界を作ることに荷担していると言える。モラルの物語を書いても、「心の真実」に気づくどころか、何も改善しないのだから、またモラルを書かなくてはいけなくなる。また書いても、同様のことが起こる。この悪循環を断ち切るための方法は、門限を破ることをやめさせるために、門限を破りなさいと言えばよかったように、偽善者に偽善者になれと言うことである。リグビーが最後、フェザートップの吸っていたパイプをくわえることはそれを表すと考えられる。この物語はパイプに火をつけるところで始まってパイプに火をつけるところで終わる。パイプはぼろきれのフェザートップを偽りの外見で飾り、世間を欺き続けるための道具であった。それをフェザートップではなく、最後モラルを語るメイン人物となったリグビーが引き継ぐということは、もっと偽善者になりなさいというメッセージを送っていると考えられる。

## V まとめ

心も、魂も、知性もなく、物語の表面しか読み流せない読者は、語り手に簡単に読みを操作されてしまう。そんな読者を浮かび上がらせた。一方、読者は自分には中身がないことを見ようともせず、他の人を教養がないと笑う側に回ったりする。そんな読者のモデルとして、フェザートップの正体を言い当てられない住民を提示するが、読者はそのことに気づかず、住民を他人事のように笑う側に回る。語り手は、さまざまな解釈ができるように物語を用意するが、表面しか読み流さなければ、センチメンタルな気分には浸るだけだし、この作品のモラルも読者には届かない。物語はリグビーがモラルを2箇所にとつて長々と語って終わる。その間、語り手はリグビーの様子をほんの少し描写するだけの存在となり、物語を積極的に語る役割から退いている。作者は、語り手が読者にモラルを直接ぶつけるという形を取らず、魔女のリグビーにそれを語らせている。これは作者は読者を非難するのではなく失望しているからである。モラルを語るリグビーに世間を欺くパイプを引き継がせるという荒療治を作者がしたのは、モラルを伝える芸術作品を書いても読者に届かないと失望しているからである。もしこの荒療治がうまくいっていれば、モラルを伝える短編が再び書かれていたかもしれない。

\*本稿は、日本ナサニエル・ホーソン協会 関西支部研究会 9月例会(平成28年9月18日 関西学院大学大阪梅田キャンパス)で行った発表を加筆・修正したものである。

## Works Cited

- Durr, Robert Allen. "Feathertop's Unlikely Love Affair." *Modern Language Notes*. Vol.72, No.7 (Nov., 1957), 492-493.
- Harris, Kenneth Marc. *Hypocrisy and Self-Deception in Hawthorne's Fiction*. Charlottesville: University Press of Virginia, 1988.
- Hawthorne, Nathaniel. *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*. Ed. William Charvat, et al. Columbus: Ohio State University Press, 1962— 今回は VIII, X, XVII を使用。引用の際には、巻番号とページ数を記入。 ※「フェザートップ」の訳は、

國重純二、『ナサニエル・ホーソン短編全集 Ⅲ』 東京：南雲堂、2015、を参考に自由に変更させていただいた。「フェザートップ」の訳を担当したのは柴田元幸である。

Melville, Herman. “Hawthorne and His Mosses.” *Nathaniel Hawthorne’s Tales*. A Critical Edition. Ed. James McIntosh. New York: W.W. Norton, 1987. 337-350.

Kern, Alfred A. “The Sources of Hawthorne's Feathertop.” New York: *PMLA* Vol. 46, No. 4 (Dec., 1931), 1253-1259.

Newman, Lea Bertani Vozar. *A Reader's Guide to the Short Stories of Nathaniel Hawthorne*. Boston: G.K.Hall, 1979.

安西祐一郎 『問題解決の心理学』 東京：中央公論社、1985。

島田太郎 「“Feathertop” 試論—ホーソンの全体像というコンテクストの中で」『学苑』 816 光葉会、昭和女子大学、昭和女子大学近代文化研究所、昭和女子大学光葉会 (2008): 1-9。

長谷正人 『悪循環の現象学—「行為の意図せざる結果」をめぐって』 東京：ハーベスト社、1991。

堀田知子 「情報操作のトリック—サブライザー」『龍谷大学紀要』 第 34 卷 第 2 号 (2013): 193-204。